

モンゴルの定住化

2003年現在、モンゴル国の総人口は250万人。このうち定住地の人口、つまり、首都、県や郡の中心地の人口は146万人である。これは総人口の58.4%が定住していることをあらわしている。さらに首都ウランバートルの人口は89万人で、モンゴル人の3人に1人は首都に住んでいることになる。

人民革命以前の定住化 1921年の人民革命直前の1918年、モンゴルの人口は64万人であった。これは現在の4分の1。この年の定住地は首都クーロンとラマ廟であるが、首都の10万人とラマ廟の4万人とあわせて14万人、全人口の21%が定住していたことになる。さらに首都クーロンの人口の民族分類を見ると、中国人が8万5千人で62%を占め、モンゴル人は5万人。つまり、革命前のモンゴル最大の定住地は外国人の都、漢人の植民地であったことがわかる。モンゴル人民革命は、まず、このクーロンをモンゴル人の手に取り戻すこと、革命後はモンゴル人がそこに住み、政治や経済を動かしていくことが課題となった。

近代化と定住化 第二次世界大戦を終えた1950年代、モンゴルはようやく近代化に取り組めるようになる。遊牧を経済の基盤として強化し、その原料で食料品、繊維、皮革工業を発展させた。大規模工場に必要な大量の労働者は、無料の教育制度によってモンゴル全土から生み出された。遊牧民の子どもたちは郡の中心地で寄宿舎生活をしながら、小中学校の義務教育を受け、さらに県の中心地の高等学校、専門学校、首都の大学に進学した。優秀な子はソ連・東欧に留学した。社会が必要とする専門性を身につけた子どもたちは、首都に用意された高層アパートに住み、労働者の権利を享受して国を支えた。

モンゴルの近代化、都市化はソ連の援助の賜物であった。ソ連はコンビナートを建設すると、そこで働く労働者のために高層アパート、学校など地域社会を丸ごとプレゼントしてくれた。アパートには電気、水道、温水、集中暖房、水洗トイレが完備している。アパートへの入居を待つ人々はゲルに住んでいたが、電化し

た生活は保障された。夏休みや週末になると郊外に職場ごとに建てられた別荘地で、自然との触れ合いを楽しんだ。定年退職者は、郊外にゲルを立て、家畜と共生する、時間に縛られない暮らしに戻っていった。

社会主義末期の1980年代には遊牧民人口が減る。首都はソ連東欧に畜産物を輸出した代価で近代化したが、原資を生み出す遊牧民の労働と生活は変わらず、都市と地方の格差が拡大したためである。遊牧民は教育や兵役制度を通じて、地方から首都へ脱出し、そこに安定した生活を求めた。

民主化後の社会変化 1990年の政治の民主化後、1991年にショック療法による市場経済への移行が敢行された。急激な国営企業の民営化は倒産を招き、失業者が増え、激しいインフレとなった。この結果、人々は生活不安から担ぎ屋になり、中国、ドイツ、ロシアに出かけるようになる。社会においてはモラルの低下、治安の悪化、家庭においては離婚、家庭内暴力、ストリートチルドレンの問題が顕著になった。一方、遊牧民人口は、家畜の私有化をきっかけに増加する。自分の家畜を増やし、経営規模を拡大し、経済的には豊かになる。しかし、地方の教師や医師の首都移住にともない、教育や医療の水準が低下した。子どもの将来を考えて郡から県の中心地の学校に子どもを移す家、母親が通学のため子どもと定住地に住み、父親が家畜と遊牧地に残る家も現れた。1990年代の後半に西部地域で春の大寒・大雪、夏の早魃などの自然災害が続き、家畜財産を失った遊牧民は家族ごと首都へ移住するようになった。首都を囲む山の斜面には囲い付きのゲルがびっしりとはりついている（写真）。市場経済移行後の首都労働者の失業問題に加えて、地方からの移住遊



牧民の貧困問題が深刻化している。首都に定住した人口は、さらによりよい生活を求めて、

ドイツ、韓国、日本、アメリカへ移住していく。革命によって取り戻した首都は、グローバリズムの下、空洞化しつつある。(国立大学法人大阪外国語大学アジア I 講座助教授 今岡良子)